

音楽と
非人間
第二回

会場

九州大学大橋キャンパス
音響特殊棟 録音スタジオ

2024年2月11日(日)
15時半開場 16時開演

このたび、2024年2月に九州大学大橋キャンパス音響特殊棟において「音楽と非人間」第2回公演を開催する運びとなりました。

本演奏会のテーマは、「音楽と非人間」です。今回は、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学をもとに、「人間の音」と「非人間」を音の関係から新たな視点でひもといていきます。

「音楽と非人間」第2回は、晩冬になぞらえるのにふさわしい演奏会です。星の川、水面下と野原を行き交う精霊と影をテーマにしています。前半は、河合拓始「イなりうた 2016」より「あたごはら異聞」は稲荷山の精霊を、高橋悠治「水に走る影」は水面下の影の不可解な音を喚起します。エバ＝マリア・ホーベンの「constellations - consolations」(星座・慰め)は、ホーベンのより個人的な夜空の印象を通して、地上の精霊から星々へと導き、後半のジョン・ケージによる「Winter Music」(冬の音楽)と「Atlas Eclipticalis」(星図)の同時演奏へと向かいます。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたり、JSPS 科研費 23K00215 の助成、そして後援を賜りました九州大学芸術工学部をはじめ、ご協力をいただきました各位に心より厚く御礼申し上げます。

主催者

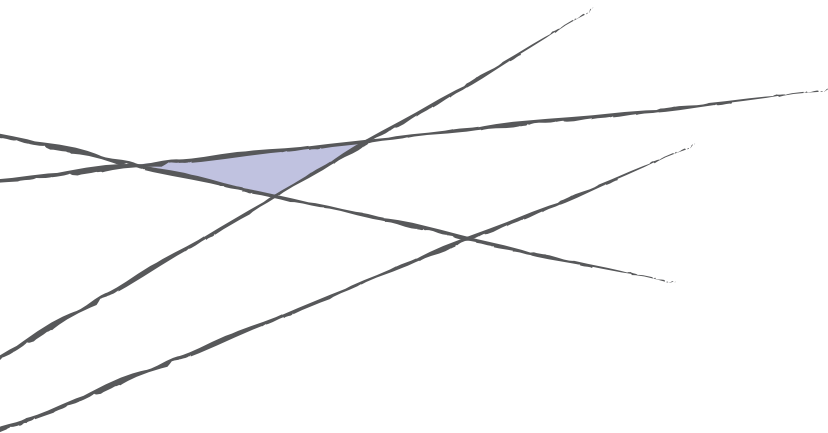
シリーズコンセプト

今年度の「音楽と非人間」というコンサートシリーズは、3年間の研究プロジェクトの一環で、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学を基にして、人間の音と非人間の音の関係を新たな視点から解釈します。作曲家たちは自然や精神的な要素との関わりを探求し、前近代の哲学や能楽の作品からインスピレーションを得ています。自然からのインスピレーションやフィールドレコーディング、伝統楽器を用いた現代音楽が交差し、不安定な時代において音楽を創り、聴き、共有する、(そして議論する)、意味のある方法を定めていきます。

2月11日(日) 16:00

「音楽と非人間」第2回は、晩冬になぞらえるのにふさわしい演奏会です。星の川、水面下と野原を行き交う精霊と影をテーマにしています。特に、コンサート後半は、ジョン・ケージによる2台ピアノのための「Winter Music」(冬の音楽)とヴァイオリンとチェロのための「Atlas Eclipticalis」(星図)が同時に演奏されます。ピアノは後述する河合のほかにも昨年度の「鍵盤三景」にも出演した西岡怜那が、ヴァイオリンとチェロは、アンサンブル・ファルケなどで現代音楽を積極的に演奏する江頭摩耶、宇野健太が出演。福岡を拠点とする現代音楽のトップランナーが集結します。

前半は、現代音楽、即興演奏を得意とする河合拓始のソロ・リサイタルです。河合「イなりうた2016」より「あたごはら異聞」は稲荷山の精霊を、高橋悠治「水に走る影」は水面下の影の不可解な音を喚起します。エバ=マリア・ホーベンの「constellations-consolations」(星座・慰め)は、ホーベンのより個人的な夜空の印象を通して、地上の精霊から星々へと導き、後半のケージのフィナーレへと向かいます。



曲目

河合拓始：「イなりうた 2016」より「あたごはら異聞」

演奏者 河合拓始（ピアノ）

高橋悠治：「水に走る影」（2014）第一曲

演奏者 河合拓始（ピアノ）

エヴァ＝マリア・ホーベン：「constellations – consolations」（2021）

演奏者 河合拓始（ピアノ）

（休憩）

ジョン・ケージ：「Winter Music」（1957）と「Atlas Eclipticalis」（1961）

演奏者 河合拓始（ピアノ）：「Winter Music」

西岡怜那（ピアノ）：「Winter Music」

江頭摩耶（ヴァイオリン）：「Atlas Eclipticalis」

宇野健太（チェロ）：「Atlas Eclipticalis」

後 九州大学



大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

援 本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです

プログラムノート 河合 拓始

河合拓始「あたごはら異聞」(「イなりうた 2016」より)

福岡県糸島市ではほぼ隔年開催の「糸島国際芸術祭：糸島芸農」で、私は2014年の第二回から毎回「イなりプロジェクト」と称して、メイン会場である松末(ますえ)権九郎稲荷神社で「奉納パフォーマンス」を行っている。一般の方々を交え、時にワークショップも経てのグループ・パフォーマンスであるが、副産物として、その創作プロセスで出来てきた歌やフシを「イなりうた」と総称して、いくつか器楽曲集にまとめている。「あたごはら異聞」は、2016年のそんな曲集からの一曲。稲荷神社の背後の山を稲荷山と呼んでいて、山中には三つの小さな祠がある。一番上の祠の前の斜面はややひらけており、その空間を「あたごはら」と名付けた。すぐ上の山頂にある「愛宕神社」に由来する名付けである。人が立ち入らないときのその空間の有様へのイマジネーションに関わる曲。

高橋悠治「水に走る影」(2014) から第一曲

高橋悠治(1938-)の「水に走る影」は三曲からなるピアノ曲集で、作曲者は第一曲について「折れ線の方向、二度と四度音程、絡まる線と崩し」と述べている。

拍はなく(senza tempo)、二分音符と八分音符のみで記譜された、一見シンプルな楽譜だが、作曲者の他の多くのピアノ曲(その共通する特徴は1970年代まで遡る)と同様、音量もタイミングも音の長さも、不均質なありかたが求められていると思われる。

題名について、その典拠(もしあれば)や含意は述べられておらず、水面下に泳ぐ魚たちの影なのかもしれないが、ひとまず固定されている楽譜の、下の?向こう側の?背後の?、いや、そこにある、デリケートな音と音楽のうごきに通じるのだろう。

エヴァ=マリア・ホーベン「constellations - consolations」(2021)

エヴァ=マリア・ホーベン(1955-)という作曲家/鍵盤奏者は、今回初めて知った。題名は「星座-慰め」といった意味合い。譜例のような、ピアノの高音域・中音域・低音域の三層に配された六つの音を、ひとつの「星座」とみなし、そんな星座が合計24個集まったものが、この曲の楽譜である。

演奏の自由度は高く、「星座」内の各音の大きさも長さも、おそらく順序も、同時的/継起的の別も、演奏者に任ざられていて、「星座」相互の重なりさえあり得るが、ただ、星座をなす音たちに聴き入り、「耳をめぐらす」ことが求められている。

作曲者の思い(この曲を作曲することでの経験)が書かれた短い文章(楽譜に添えられている)は、このプログラムの別箇所に掲載されている通りで、演奏者としては、なぜこれが「慰め」であり得るのかは実際に音を出してみたら、たちどころに了解できる気がしたのだが、聴く皆さんに果たしてそれがどのように伝わるでしょうか。

The image shows a musical score example for the piece 'constellations - consolations'. It consists of three staves: a treble clef staff, a grand staff (treble and bass clefs), and a bass clef staff. The notes are: Treble clef: G4 (quarter), A4 (quarter), B4 (quarter); Grand staff: C4 (half), D4 (quarter), E4 (quarter); Bass clef: F3 (half), G3 (quarter), A3 (quarter). Above the treble clef staff, there is a bracketed group of notes G4, A4, B4 with a dotted line above it and the number '8' with a superscript '100' (8¹⁰⁰). Below the bass clef staff, there is a bracketed group of notes F3, G3, A3 with a dotted line below it and the number '8' with a superscript '100' (8¹⁰⁰). Below the bass clef staff, there is a triangle symbol and the text '譜例' (Example).

文：河合拓始

constellations – consolations

プログラムノート

the agreement concerning the game conveyed the permission to enjoy myself.

I regained confidence step by step, and I recovered the trust in my vulnerability, my weakness, and my defenselessness.

contemplating six-tone constellations.

このゲームに関する合意は、私自身を楽しむことの許しを伝えた。

私は一歩一歩自信を回復し、私の脆さ、弱さ、無防備さに対する信頼を取り戻した。

六音星座を深く考える。

文：エヴァ＝マリア・ホーベン（和訳：椿大也）

ジョン・ケージ – 「Winter Music」(1957) と 「Atlas Eclipticalis」(1961)

1957年に書かれた1～20台のピアノのための「Winter Music」と、1961年に書かれた1～86台の管弦楽器（ソロからフルオーケストラまで）のための「Atlas Eclipticalis」は、よく一緒に演奏される。これらの楽譜には多くの共通点があるが、興味深い相違点もある。ケージは自然—彼は自然を人間世界と連続したものとみなしていた、人間は動物であり、したがって人間たちや人間たちが作るものもすべて「自然」なのだ—と季節に大きな関心を寄せていた。冬に対する見方は、インド哲学から取り入れた凍てつくような不動感である。冬は死んだもの、モノクロームのもの、吹雪の季節、氷のように静かな緊張の季節である。

「Winter Music」は、チャンス・オペレーションが数多く起こる作品である。チャンスは、作曲の過程から自我を排除し、より「自然」に近づくためのケージの方法だった。「Winter Music」では、ページ上の音符の配置は、紙そのものの偶然の欠陥によって決定されて、五線譜は後から楽譜に付けられたものだ。楽譜には20のページがあり、どの順番で弾いてもよく、速さも指定されていない。今回の演奏では、各奏者が易经で選んだ4ページを演奏するが、その順番は演奏前に直接易经で決めるので、演奏者も含めて全員が新鮮な音世界になる。スピードは1ページ10分で、「Atlas Eclipticalis」のペースに合わせて選んだ。

「Atlas Eclipticalis」を作曲するために、ケージは「Atlas Eclipticalis 1950.0」（チェコの天文学者アントニン・ベクヴァール [1901-1965] が1958年に出版した星の地図帳）を使い、その星図の上に五線譜を重ね合わせた。ほとんどのパートは、ケージの指導の下、一柳慧を筆頭とするケージのアシスタントによって実際に作られたものである。各音符は1つから10個で、ランダムに2つのグループに分かれている。音程は明確に記譜されているが、例えば、音符の大きさは振幅を決定し、五線譜に対する垂直方向の配置は、標準的な調律された音程からの微分音的なずれを示すなど、やや変わった方法で記譜されている。今回の演奏では、86パートのうち2パート（ヴァイオリン6パートとチェロ6パート）が演奏される。この2つのパートは、易经でランダムに選ばれた。

もちろん、解釈の自由は聴き手の絶対的な権利であるが、これらの曲のタイトルをそのまま鵜呑みにして、宇宙の虚空に囲まれた中央の、地上の、騒々しく破壊的で緊張感のある静かなピアノが、時折静かな弦楽器の星の光につつまれ、ピアノの響きを通して聴こえると想像しても、きっと間違いではないだろう。

プロフィール

コンポーザー

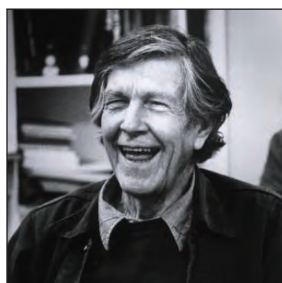
Eva-Maria Houben / エヴァ＝マリア・ホーベン



Folk ヴァング芸術大学 (エッセン) で音楽教育を学び、オルガンをギースベルト・シュナイダーに師事した。彼女は音楽学の博士号と大学教授資格を取得し、ゲルハルト・メルカトール大学 (デュイスブルク、現デュイスブルク・エッセン大学) とロベルト・シューマン大学デュッセルドルフで講義を行った。1993 年から 2021 年 2 月 28 日まで、ホーベン教授はドルトムント大学の「音楽・音楽学研究所」で彼女の焦点である音楽理論と現代音楽の両方を講義した。現在に至るまで現代音楽、その作曲家、伝統音楽に関する多くの書籍が出版され

た。彼女は 30 年以上オルガンの演奏を続けている。また、作曲家集団「ヴァンデルヴァイザー楽派」のメンバーであり、その作品は「エディション・ヴァンデルヴァイザー」(ハーン) から刊行されている。彼女の作品一覧にはオルガン、ピアノ、クラリネット、トロンボーン、チェロ、その他の独奏楽器のための作品、声楽とピアノのための作品、管楽器や室内合奏、オーケストラ、声楽とオーケストラ、合唱曲、電子音楽のための作品が含まれる (www.wandelweiser.de)。

John Cage / ジョン・ケージ



ジョン・ケージは 1912 年 9 月 5 日にカリフォルニア州ロサンゼルスで生まれ、1992 年 8 月 12 日にニューヨークで死去した。ポモナカレッジでリベラルアーツを学ぶ。作曲の師匠はヘンリー・カウエルとアーノルド・シェーンベルクである。アメリカ国立芸術文學院に選出され、アメリカ、ヨーロッパ、日本で数多くの賞を受賞した。また、世界中の多くの重要な演奏団体から委嘱を受け、非常に活発な活動を続けていた。ケージの作品が 20 世紀の音楽と芸術に与えた刺激と影響を計算し、批判的に評価することは非常に難しいが、ケージの音

楽と考えを抜きにして現代の音楽の発展を理解することはできないことは明らかである。プリバード・ピアノの発明や打楽器との取り組みによって、音楽の時間的次元を構成する多くのユニークで魅力的な方法を想像し、探求するようになった。偶然性による不確実な作曲の分野の創始者であり、第一人者であると世界的に認められている。アーノルド・シェーンベルクはケージについて、「天才的な発明家」と評している。

[ベータース出版社による (ゼミソン訳)]

高橋悠治 / TAKAHASHI Yuji



1938年東京に生まれる

柴田南雄、小倉朗、ヤニス・クセナキスに作曲を学ぶ

1963-66年フランス、ドイツで現代音楽のピアニストとして活動

1966-71年アメリカで演奏活動とコンピュータ音楽の研究

1972年から東京 1974-76年作曲家グループ「トランソニック」を組織して季刊誌を編集

1976年から画家・富山妙子と映像と音楽による物語の共作をつづける

田中信昭との協同作業でこれまでに合唱音楽を20曲以上作曲

1978-85年「水牛楽団」で世界の抵抗歌をアレンジ・演奏

1980-87年月刊ミニコミ「水牛通信」発行

1991-2006年高田和子のために日本の伝統楽器と声のための作品を作曲

2012年波多野睦美 柘尾克樹と声・バリトンサクソフ・ピアノのトリオ「風ぐるま」

http://www.suigyu.com/yuji_takahashi/

プロフィール

演奏者

河合拓始 / KAWAI Takuji



ピアニスト、作曲家。1963年兵庫県神戸市生まれ。幼時よりクラシックピアノを学び、その後現代音楽に興味を持つ。1987年頃から即興演奏を始める。1988年京都大学経済学部(社会思想史専攻)卒業、1991年東京藝術大学大学院(音楽学専攻)修了。在学中から即興音楽家としてソロやアンサンブルのほか様々なジャンルのアーティストと共働する。近年は現代音楽作品

近年の主なコンサート：

2023年「自然真音楽」(アクロス福岡円形ホール)

2022年「ここが家だ」(アクロス福岡円形ホール)

2021年「システムを変える」(アクロス福岡円形ホール)

2021年「一柳慧マラソンコンサート」(神奈川県立音楽堂)

2018年～ プロジェクト"あじみずモ"

2015年・2018年「高橋アキ+河合拓始・二台ピアノコンサート」(両国門天ホール)

2014年～ 糸島国際芸術祭(糸島芸農)(隔年開催)での奉納パフォーマンスプロジェクト

2014年「ハッセに寄せて」(東京、福岡、神戸など)

2013年「実験工房ピアノ演奏会再現コンサート」(世田谷美術館、北九州芸術劇場)

コンサートと即興ライブのほか、作曲、トイピアノや鍵盤ハーモニカの演奏会、朗読や舞踊との共演、ことば表現やパフォーマンス、一般の方々とのワークショップなど活動は多岐に渡る。2008年・2012年欧州演奏旅行。2011年ニューヨークでの第一回 UnCaged Toy Piano Festivalに招聘参加。東京で二十数年活動後、2012年から福岡県糸島市在住。CDに図形楽譜による

「一柳慧ピアノ音楽」(Omegapoint)、トイピアノによる「マ・メール・ロワ」(Novel Cell Poem)など。2021年、任意団体「クリスチャン・ウォルフの音楽コンサート実行委員会」を立ち上げ、現代音楽・即興音楽の公演を企画する。

公式ウェブサイト：

<http://www.sepia.dti.ne.jp/kawai/>

西岡怜那 / NISHIOKA Reina



福岡県出身。5歳よりピアノを始める。ジャック・ルヴィエ、横山幸雄らに師事。2014年に渡欧し、2017年にオーストリア国立ザルツブルク・モーツァルテウム大学

ピアノ科、2021年に同学大学院ピアノ・ソリスト科を共に最優秀で卒業・修了。大学院在学中、2018年度モーツァルテウム大学奨学金を授与され、2019年度 Erasmus Plus 奨学生としてロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校にて学びディプロムを取得。全日本学生音楽コンクール北九州大会第1位、飯塚新人音楽コンクール第1位、Vienna International Piano Competition 第1位など、国内外の多くのコンクールで入賞を重ねる。九州交響楽団、ポーランド国立クラクフ管弦楽団等との共演をはじめ、日本各地、オーストリア、ドイツ、イギリ

ス、フランス、スペイン、ポーランドにて演奏。2018年のウィーン・ロブコヴィツ宮殿でのソロリサイタルは多数の新聞誌面で取り上げられ、2022年のオールショパンリサイタルは(公財)日本演奏連盟/増山美知子奨励ニューアーティストシリーズ公演として採択される。現在は九州大学大学院芸術工学府博士後期課程に在籍しており、音楽活動の傍らクラシック音楽イベントの社会的研究を進めている。

公式サイト：

<https://www.reinانشiohka.com/>

江頭摩耶 / EGASHIRA Maya



名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て愛知県立芸術大学音楽学部を卒業。桑原賞、中村桃子賞を受賞。中部読売新人コンサートに出演。

2008年にフィンランド国立シベリウスアカデミーを最優秀の成績で卒業。在学中には

シベリウスアカデミーオーケストラのコンサートマスターに繰り返し抜擢され、エサベッカ・サロネン、レイフ・セゲルスタムらと共演。

これまでに、クオピオ市交響楽団首席奏者、ラハティ市交響楽団第二ヴァイオリン奏者、シベリウスアカデミー非常勤講師（以上フィンランド）、ポルト・カサダムジカ交響楽団（ポルトガル）コンサートマスター、愛知県立芸術大学非常勤講師などを務める。ゲストコンサートマスターとして、ヨーエンスー市交響楽団、オウル市交響楽団（以上フィンランド）、ノールランドオペラ（スウェーデン）、クワ・ズル・ナタル交響楽団（南アフリカ）、愛知室内オーケストラなどに客演。

2014年には名古屋でソロリサイタルを行い、「音楽の友」にて高評を得る。

2015年から現在まで、モザンビークのマプト国際音楽祭、シキツイプロジェクトに毎年招聘され、継続的に演奏と指導に携わり、2016年、2017年には同国および南アフリカでの指導とリサイタルのため、国際交流基金から助成を受けた。

現代音楽にも造詣が深く、2014年からは名古屋を拠点とした現代音楽アンサンブル「音楽クラコ座」にヴァイオリン奏者として参加。2020年からは福岡を拠点としたアンサンブル・ファルケのメンバーとして、多彩な演奏活動を続けている。

宇野健太 / UNO Kenta



大分県日田市生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て、ウィーン私立音楽芸術大学を最優秀の成績で卒業ならびに同大学院を最優秀の成績で修了。またグラーツ国立音楽大学現代音楽演奏学科にて「クラングフォーラム・ウィーン」のもとで現代音楽の演奏法を学ぶ。

チェロをこれまでに金木博幸、山崎伸子、河野文昭、W. シュルツ、C. オッテンザマー、B. ヴァインマイスター、F. バルトロメイの各氏に師事。

2017年、クライバダ国際チェロコンクール第2位、同年バドヴァ国際音楽コンクール弦楽器部門第1位、総合部門第2位を獲得。

これまでにソリストとして東京並びに北上にてドヴォルザークチェロ協奏曲、ウィーン・コンツェルトハウスにてジェンキンスの「武装した男」、クライバダ室内管弦楽団と佐藤聡明の「RUIKA」、品川フィルハーモニー・アンサンブルとルトスワフスキの「グラウヴェ」、ハイドンのチェロ協奏曲、大分ジュニアオーケストラとチャイコフスキーの「ロココ風の主題による変奏曲」を演奏するほか、ルクス音楽祭、シオン音楽祭、サンクト・パウロ音楽祭などのヨーロッパの音楽祭への出演も果たした。

2020年より九州を拠点にソリスト、室内楽奏者として活動。

来年度も『音楽と非人間』コンサートシリーズを続けます。

日程とプログラムは未定です。

今後のコンサート情報を見逃さないよう、X (旧 Twitter) や Peatix、芸術工学部 YouTube チャンネルのフォローをお願いします。



X (旧 Twitter)

https://twitter.com/geikou_otobunka



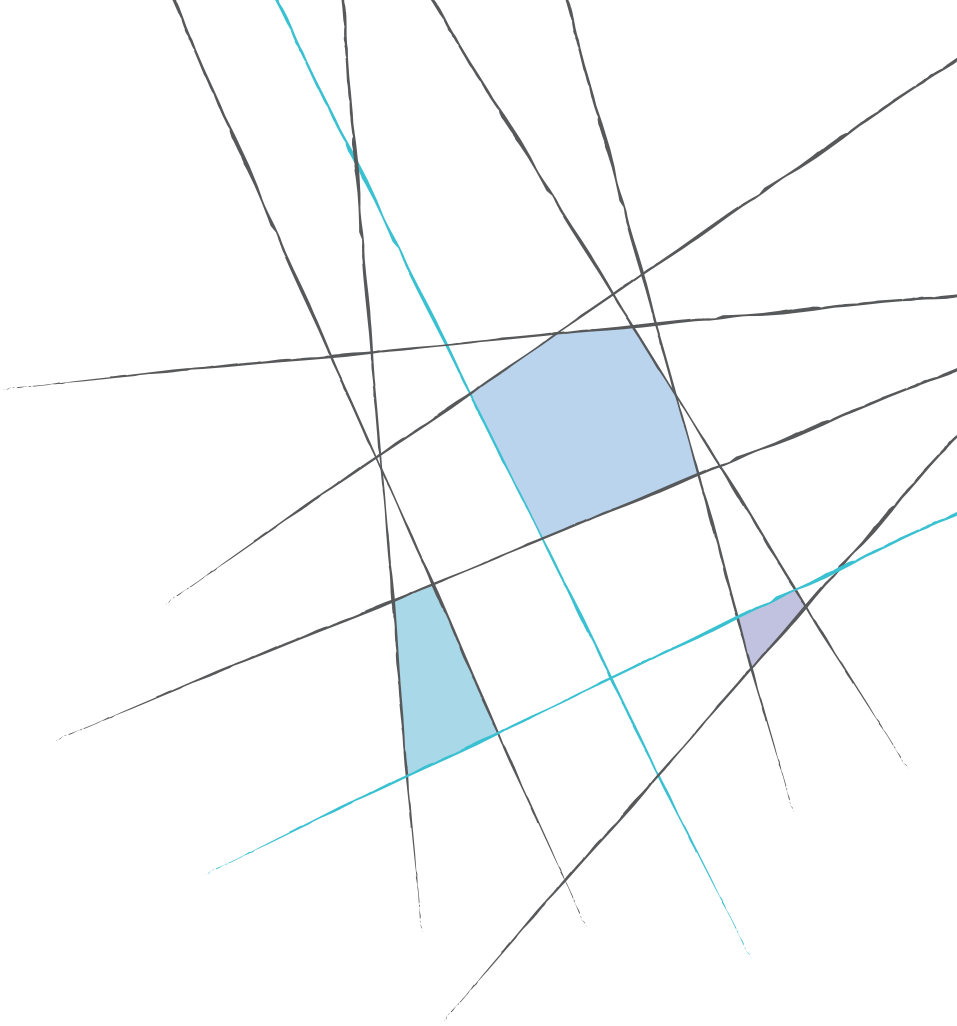
Peatix

<https://soundculture.peatix.com>



芸術工学部 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/@KyushuUniversityDesign>



音楽と 非人間